

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Wurdigung und Vererbung der proletarischen Literatur in dem Deutschland nach dem Weltkrieg

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1977-08-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小川, 正巳, Ogawa, M. メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2179

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



戦後のドイツにおける プロレタリア文学の評価と継承

小 川 正 巳

1920年代及び30年前半に世界的にさかえたプロレタリア文学は、抬頭してきたファシズムによって抹殺されるか、あるいはファシズムに対する闘いである人民戦線のなかに止揚された⁽¹⁾。

ファシズムが倒された第二次世界大戦後、それではプロレタリア文学は如何に評価されているか、あるいは継承されているとすれば、いかなる形で継承されているか、とりあえずかつてソ連に次いでプロレタリア文学がさかんであったドイツにおいてこれを見よう。

ドイツは第二次大戦後、東と西とに分裂したので、以上の問題も東と西とでおのずから違ってくる。

東ドイツ (DDR)

DDR においては60年代の諸研究をふまえて⁽²⁾、1930年からベルリンのドイツ学術アカデミー文芸・言語部門、社会主義文学班によって『二十世紀ドイツ社会主義文学史のために』というシリーズが出はじめた。第一巻はアルフレート・クライン等による『労働階級の文学——ドイツ社会主義文学の形成について。1918—1933』(1921)、第二巻はフリードリッヒ・アルプレヒト

(1) 詳細は拙稿「世界のプロレタリア文学の展開—ドイツに重点を置いて—」神戸外国語大学「外国学研究Ⅴ」1977参照

(2) 代表的なものとして、Zur Tradition der sozialistischen Literatur in Deutschland, Eine Auswahl von Dokumenten. Aufbau-Verlag, Berlin und Weimar 1962, 1967. / Aktionen Bekenntnisse Perspektiven, Berichte und Dokumente vom Kampf um die Freiheit des literarischen Schaffens in der Weimarer Republik. Aufbau-Verlag 1966

『決断するドイツ作家——労働者階級への道・1918—1933』(1970), 第三巻はアルフレート・クライン『階級の委託をうけて——ドイツ労働者作家の歩みと業績・1918—1933』(1972), 第四巻はクラウス・ケンドラー『演劇と階級闘争——ヴァイマル共和国の社会主義演劇における時事問題と劇的葛藤の諸関係』(1970), 第五巻はイルムフリート・ヒーベル『F・C・ヴァイスコップフ——作家と批評家』(1973)。

それらの研究から見た、現在の DDR におけるプロレタリア文学の評価と継承に関してはいくつかの *Selbstvevständigung*, (自明の事柄) があるようである。それら自明の事柄がどのようにして自明の事柄になったかは一つの問題であるが、それら自明の事柄が評価の基準となるとともに、実践的継承の基準ともなっているようだ。敗戦とともにかつてのプロレタリア文学の主流派は亡命地(主としてソ連, メキシコ)から帰ってきて、ソ連の協力のもとに社会主義国家の建設を行った。したがって自明の事項Ⅰとして「社会主義国民文学」がまず言われねばならない。ドイツ文学史は「社会主義国民文学」という基準によって再遍成されねばならない。その再遍成に際して、ソ連が十月革命とともに新国家となったように、DDR は11月革命とともに始まったプロレタリア文学をその現代文学史の発端に位置づけようとしている、これが自明の事柄Ⅱと言えよう。そしてそのドイツ・プロレタリア文学を特にソ連との関係において解明しようとする姿勢⁽³⁾が顕著である。反ファシズム闘争において結成された人民戦線が唱えたヒューマニズム, しかも社会主義を究極におく意味においての「新ヒューマニズム」が、国民文学を越えたインターナショナルな自明の事柄Ⅲと言えよう。それらを通じての文学

(3) 「二十世紀ドイツ社会主義文学史のために」の第一巻『労働者階級の文学』においても、チェッコ、アメリカとの関係をあつかった論文はそれぞれ一篇ずつであるが、ソ連に関しては、イルムフリート・ヒーベル『ドイツ作家の十月革命及びソヴェト連邦との関係』, アルフレート・クライン『ドイツから見たソヴェト国家』, エドガル・ヴァイス『1917—1933年のソヴェト文学発展に対するドイツ社会主義作家の関係』, ヴアルトラウト・エンゲルベルク『ヴァイマル共和国時代の文学的報告, ルポルターージュに写ったソ連』。

理論的自明の事柄(Ⅳ)としては、1934年第一回ソヴェト作家大会で打ちだされ、それ以後世界の社会主義国の文学的基準となっている「社会主義リアリズム」がある。社会主義リアリズムはドイツ・プロレタリア文学の「長期にわたる文学的実践の結果⁽⁴⁾」であると言われているが、果してそうであろうか。

プロレタリア文学が、以上のような自明の事柄のもとに照らされたとき、どのような評価をうけるか、特に当時の主流派の見解に対する評価をひろい出して見よう。

まず1919年から相対安定期がはじまる1923年までプロレタリア文学を占拠した、主として表現主義出身のインテリである左翼共産主義者たちに対して⁽⁵⁾、かれらの社会主義が科学的でなく倫理的である点批判しているが⁽⁶⁾、その革命性、特に大衆運動(Massenbewegung)を拓いたものとして評価されている(オスカル・カーネル、エリッヒ・ミュゼム、ベルンハルト・ケラーマン、フランツ・ユング、オスカル・マリア・グラーフ、レオンハルト・フランク⁽⁷⁾)。その多くが1923年、革命の挫折とともに労働者運動から離れていったにもかかわらず、プロレタリア文学の発端を高揚させたこの多数派を評価することは自明の事柄Ⅱに応ずるものであろう。

それに対して、当時のKPDにあってメーリングに基く古い体質に拠って、左翼共産主義者的な新しい傾向に批判を加えていたゲルトルート・アレクサンダーは、社会主義革命前のプロレタリア文学は認めないというメーリングの考えがトロツキズム批判に重ねられる以上、現在賛同を得ていない。「われわれは<芸術>という言葉ラディカルにわれわれのプログラムから追

(4) Alfred Klein; Zur Entwicklung der sozialistischen Literatur in Deutschland 1918—1933. In: „Literatur der Arbeiterklasse,” S. 103

(5) かれらに対する西ドイツ側からの接近の例としては、Literatur in Klassenkampf. Zur proletarisch-revolutionären Literaturtheorie 1919—1923. Eine Dokumentation von Walter Fähnders und Martin Rector. 1971

(6) A. Klein: Zur Entwicklung der sozialistischen Literatur... S. 37

(7) ibid. S. 41

放した。われわれの芝居は、われわれのアクチュアルな出来事にかかわろうとするための、〈政治行動〉とするための呼びかけだった⁽⁸⁾」と言うエルヴィン・ピスコートのプロレタリア劇場をめぐる論争（1920）におけるG・アレクサンダーの発言をクラウス・ケンドラーは次のように批判している、G・アレクサンダーは「劇場と言わずに、プロバガンダと言えればいい、劇場は芸術なのだから」と言っているが、芸術や劇場という概念廃止を求めているピスコートに対する何ら本質的批評になっていない⁽⁹⁾。またG・Aは「プロレタリア劇場に集まる観客はブルジョア芸術廃止を要求するダダ信奉のブルジョア文学者である」と言っているが、「争うべくもなく労働者も拍手を送ったので、怒りはさらに上昇した、というのはこんないかさま——それ以外にはG・Aは説明しようがなかった——に労働者がさらわれたのであるから」。そして「……ピスコートのプロレタリア劇場は……あらゆる異論にもかかわらず、功績をおさめた」ことを認めている⁽¹⁰⁾。

表現主義論争（1937～38）において主流派の代表としてジョージ・ルカーチが「表現主義はファシズムと同じ精神の子だ」という立場から、表現主義がプロレタリアートの立場に移行するさい、「表現主義的荷物を投げすてさせられた」（『表現主義の偉大と頽廃』）とするのに対して、左翼共産主義者の多くの前歴である表現主義を擁護してクラウス・ケンドラーはこう言っている、「首尾一貫、表現主義の傾向がさらに社会変革へと追求され、具体的な社会空間のなかに固定される場合は、社会主義的ドラマへの移行の道がひらかれる。この荷物が投げすてられる場合は、ファシズム的見解がひろがる可能性⁽¹¹⁾がある」。当時の主流派（ルカーチ、ベルンハルト・ツィーグラ等）

(8) Erwin Piscator: Das Politische Theater. Reinbek 1963. S. 36

(9) Klaus Kändler: Drama und Klaussenkampf. Beziehungen zwischen Epochenproblematik und dramatischem Konflikt in der sozialistischen Dramatik der Weimarer Republik, S. 103

(10) ibid. S. 103. 102.

(11) ibid. S. 149

にまっこうから反対するこの DDR の表現主義擁護は、その主流派代表のルカール批判に基くとも考えられるし、また DDR 文学の代表的作家ヨハネス・R・ベッヒャーが表現主義から「首尾一貫」、社会主義作家に発展したことも考えられるが、いずれにしてもこの論争に参加した反主流派（ヘルヴァルト・ヴァルデン、クラウス・ベルガー、クルト・ケステン、ペーター・フッシャー等）の主張が、クラウス・ケンドラーと同じく「表現主義から現代（社会主義リアリズム）への発展的継承性を証明」しようとして、その主張者の幾人かが肅正で姿を消したことはいなめない。

1925年、テールマンによる中央委員会確立、極左排除、同年第10回党大会での党の組織がえ、すなわち企業細胞に基づかずことによる党の安定化。そのあらわれとしての労働者通信員運動⁽¹²⁾、1927年の第11回党大会によるアジプロ劇団の奨励。この二つの文学の大衆化に関して、1928年に設立された「プロレタリア革命作家同盟」の機関誌『リンクスクルヴェ』(1928～1932)紙上で問題がおきている。

まず労働者通信員運動に関して、1930年2月号にエーリッヒ・シュテフィンの『プロレタリア文学の原細胞』と、これに対するN・クラウスの『文学問題における経済主義に反対する』という批判。前者は労働者通信員運動にプロレタリア文学の原点を求めるのに対して、後者（編集部の立場でもあった）は労働者通信員運動は文学でないとする。アルフレート・クラインはこの論争を紹介して、N・クラウスの説を支持する⁽¹³⁾。（クラインはむしろここ

(12) 1921年、コミンテルン第3回大会ですでに「大衆のなかへ！」というスローガンのもとに軍通信員（ボインコール）、農村通信員（セリコール）、労働者通信員（ラブコール）設立、1923年以後『プラウダ』に通信発表、同年第一回通信員会議が、1924年第2回通信員会議が行われ、同年のコミンテルン第5回大会の決議は「共産党のボルシヴィキ化」、国内の通信員運動を盛にするとともに国際的にも連絡すること。ドイツにおいても職場新聞（職場細胞新聞、インプレコール）と党機関誌に通信発表、後者はすでに1921年からカール・グリュンベルクが担当して『ディ・ローテ・ファーネ』に。1924年4月に『ディ・ローテ・ファーネ』を中心に通信員組織の正式結成、同年12月に第一回ローテ・ファーネ労働者通信員大会をベルリンで。

(13) *ibid.* S. 70

で労働者通信員運動が労働者にものを書くことを教えるとともに、プロレタリア文学の受け手層を拡大したことを指摘している)。

アジプロ劇団に関しては、『リンクスクルヴェ』1930年3月号にマクシム・ヴァレンティンの『赤いメガフォン』、同年4月にヴァレンティンの『アジプロ劇の闘争価値』と編集部の『ヴァレンティンへの回答』が出ている。この問題をふくめて、ヴァレンティンに関して『ヴァイマル・バイトレーゲ』(1976年6月)にグドルン・クラットがヴァレンティンとの対談と、かれ自身の『マクシム・ヴァレンティンの美学的位置について』が出ている。かつてペルトルト・ブレヒトが敬愛したヴァレンティンの消長は、ある意味でドイツ・プロレタリア革命文学の消長を代表しているように思われるので、少しくわしくふれておこう。ヴァレンティンと『リンクスクルヴェ』の編集部との対立は、前者が芸術価値を排して闘争価値を強調したのに対して、後者は芸術価値と闘争価値との統一を求めた。グドルン・クラットは編集部が闘争価値というとき、「傾向性」と誤解していたとする。ヴァレンティンの闘争価値とは「闘いのなかで新しい方法を見出す」ことであると述べて、ヴァレンティンを救っている。そしてクラットは、この論争が終ったあとで、ルカーチが『リンクスクルヴェ』1932年6月の『傾向性が党派性か』で再びこの問題を間接的にとりあげたとしている。すなわちルカーチは「純粹芸術」に対する反動としておきた「傾向性」に、19世紀のブルジョア・リアリズムから導き出された「党派性」を対置させて、後者を批判基準にしているとする。ルカーチの「党文学」は、明らかに党によって闘争価値と芸術価値とが統一されたレーニンの「党文学」⁽¹⁴⁾とは違う。ヴァレンティンの闘争価値こそむしろレーニンの「党文学」に一致する。ヴァレンティンの闘争価値の正しさは、1933年以後の反ファシズム闘争において、新しい方法としてのヒュー

(14) 「文学活動はどんなことがあっても絶対に他の部分と分ちがたく結びついた社会民主党活動の部分にならなければならない、「プロレタリアートの党活動の文学的部分は党活動の他の部分と千遍一律に同置されてはならない。(『党の組織と党の文学』)

マニズムの遺産を見だしたことによって証明される。それはヴァレンティンがモスクワに亡命して、ブルジョア・ヒューマニズムから「首尾一貫」社会主義ヒューマニズムに移行したスタニスラフスキーを、かれのメイエホリドへの親近性にもかかわらず選んだこと⁽¹⁵⁾にあらわれている。そしてこのヒューマニズムの問題こそ、国民文学を必要とする新生ドイツに役立つものだ。ここに私たちは1933年までのプロレタリア革命文学は正しいとし、1933年以後は反ファシズム闘争、人民戦線とともに社会主義リアリズム、新しいヒューマニズム、国民文学がプロレタリア革命文学を乗り越えたとするDDRの基本的自明の事柄を見る。そしてプロレタリア革命文学に対してリアリズムを説いたルカーチはそのリアリズムが、革命的現実ではなくて、19世紀のブルジョア・リアリズムに基いているが故に批判されるという自明の事柄も。

1931年にモスクワから、ベルリンの『リンクスクルヴェ』に乗り込んできたジョルジュ・ルカーチはそれ以後『リンクスクルヴェ』の代表的批評家として精力的な活動を展開している。1931年11月号にヴィリ・ブレードルの『機械工場 N&K』、『ローゼンホーフ通り』の批判（それに対しては1932年1月号のブレードルの『一步前進』、4月号のオットー・ゴシュの『他の人たちの批判』とそれに対するルカーチの批判『文学における自然発生理論に対する反論』）に始まり、1932年6月号の『傾向性か党派性か』、次いで1932年7、8月号の『ルポルタージュか形成か——オットヴァルトの小説について批評的註釈』でエルンスト・オットヴァルトの『なぜならかれらはそのなすところを知らばなり』という司法小説を批判している、これに対して同年10月号にオットヴァルトは『〈事実小説〉と形式実験』で反論すると、さらにこれに対して『リンクスクルヴェ』の最終刊である11、12月合併号で『災

(15) かつて敬愛したヴァレンティンのこの変化に対して、亡命者ブレヒトはその『作業日記』で批判している。1938年8月15日の日記に、アジプロは理性的だが、ヴァレンティンが宗旨がえしたスタニスラフスキーはブルジョアの感情であると書き、さらに1947年9月15日の日記には、ヴァレンティンの『スタニスラフスキーの書』を批判して、その訓練は自己観察を除いては、外界に対して閉ざされていると書いている。

を転じて福をなす』でもって再批判している。

ルカーチのブレードルに対する批判は、労働者通信員出身であるブレードルの小説が労働者通信員運動の表現形式であるルポルタージュの性質もっている点、弁証法的でないとする。これは次のオットヴァルト批判にも通じてることであって、個と全体との弁証法の表現である「形成」に対して、ルポルタージュは全体を見ない個の表現にすぎないというのである。そしてこれが当時の『リンクスクルヴェ』の編集部の立場でもあった。このルカーチの批判に対して、アルフレート・クラインは「雑誌『世界革命文学』はすでに当時ブレードルへのこの批判を了承していなかった⁽¹⁶⁾」とブレードルを擁護するだけではなく、さらにルカーチのこの批判をプロレタリア革命文学への否定的評価とする。「ルカーチは何より革命的現実から発していない、かれは一つの文学作品の成否に対するクリテリウムを何より過去からとっている、プロレタリア革命文学の正しい判断の立場とは全く違う立場である⁽¹⁷⁾」。

ルカーチの批評は、労働者出身のブレードルだけでなく、知識階級出身のオットヴァルトに、その『ルポルタージュか形成か』で及んでいる。オットヴァルトとの論争においては、ルポルタージュを芸術手段とするアプトン・シンクレア、トレチャコフ、エレンブルク、プレヒト等の「ラディカルな新しい芸術」が反形式的であるという批判の対象になっている。しかしこのルポルタージュを芸術手段とする「ラディカルな新しい芸術」も、アルフレート・クラインはヨハネス・R・ベッヒャーなどのような表現主義出身のプロレタリア革命文学と並んで、その「幻想破壊の〈即物的〉書き方の故に、エゴン・エルヴィン・キッシ、ルードヴィッヒ・レン、プレヒトの名をあげて評価⁽¹⁸⁾している。等しく知識階級出身で、政治劇場という「新しい劇場」を展開したエルヴィン・ピスカートルも、『リンクスクルヴェ』の1930年12月号の『政治劇場の突破』で、「私はこの雑誌でしばしば攻撃されてきた」と述べ

(16) *ibid.* S. 109

(17) *ibid.* S. 109

ている。この雑誌で批判されたひとたちが名誉回復しているなかで、その批判の側にあやまちを、批判の側で最も精鋭であったルカーチが一身に背負われている様は、まさにスケープ・ゴートの感がないことはない。⁽¹⁹⁾

ルカーチと対照的な存在はヨハネス・R・ベッヒャーである。かれは常にあやまったことがなかった。表現主義からも正しくプロレタリア革命文学に移行した。テールマン体制以後のドイツのプロレタリア革命文学（労働者通信員運動、プロレタリア革命作家同盟）の集結点でもあった。ただアルフレート・クラインは、プロレタリア革命作家同盟の第二期、すなわち1930年—1933(5)年のベッヒャーに一度だけ批判を加えている。第二期は転換の時期であった。事実ハリコフ会議（1930年11月）に積極的に参加したベッヒャーは1931年10号の『リンクスクルヴェ』にハリコフ会議の総決算ともいふべき『われわれの転換——プロレタリア革命文学の存在の闘争から拡大への闘争』を書いている。A・クラインはこう書いている、「ここにおいて19世紀の社会主義傾向文学の地平線は越された、もともとヨハネス・R・ベッヒャーは文学史的事態と二者択一への新なる洞察に幾分高揚して、この時期に同様に新なる方向をとりつつあったブルジョア文学の進歩的諸勢力に正しく対応しなかった。同時代の文学創造に対するかれの批判はほとんど変らなかつたし、——ブルジョア出身の反ファシズムの作家との同盟のために遺憾なことではあったが、セクト的様相をおびていた⁽²⁰⁾」。これはベッヒャーを中心とするドイツ・プロレタリア革命文学がハリコフ会議に積極的でありすぎたということだ。というのはハリコフ会議を主催したソ連のラップはその文学的方法である唯物弁証法的創作方法とその「同盟者か敵か」というスローガンとともにソ連ではすでに揺ぎはじめていたのだ。ラップを唯一のソ連の文学代表と信じこんでいたドイツ・プロレタリア革命文学は、1932年にそのラッ

(18) *ibid.* S. 59 f.

(19) そしてそれらすべては、1956年のハンガリー蜂起に加担したりルカーチに発するわけであるか。

(20) *ibid.* S. 101

ブが解散させられてどのようなショックを受けたことであろうか。A・クラインのベッヒャーに対する批判は、DDRの自明の事柄Ⅲである「新ヒューマニズム」の基点である1935年の人民戦線の立場からなされている。ラップ解散から2年後の第一回ソヴェト作家大会が社会主義リアリズムを打だしたときはすでに、ドイツでは実質的にはプロレタリア革命文学はなくなっていた。社会主義リアリズムがドイツ・プロレタリア革命文学者にとどいたのは、⁽²¹⁾ やっと亡命時になってからであった。自明の事柄の社会主義リアリズムはドイツ・プロレタリア文学の「長期にわたる文学的実践の結果」であったろうか。アジプロ劇のマクシム・ヴァレンティンのスタニフラスキーへの選択が「長期にわたる文学的実践の結果」と判断すれば、⁽²²⁾ そうであろう。

追記

『二十世紀ドイツ社会主義文学史のために』は、第5巻としてイルムフリート・ヒーベルの『F・C・ヴァイスコップフ』を出していることは既に述べた。だがそれまでの巻がドイツ・プロレタリア革命文学総体に関する研究であるのに対して、第5巻が一人の作家兼批評家に当てられたということは、この一人の作家兼批評家F・C・ヴァイスコップフは今のDDRにとって、⁽²³⁾ プロレタリア革命文学を語る際に重要な意味があると見なければならない。事実プロレタリア革命文学に始まる社会主義文学の総括において、以上述べたように正の位置にヨハネス・R・ベッヒャーをおけば、負の位置にルカーチが置かれるわけであるが、ヴァイスコップフはベッヒャーからも、ルカー

(21) *ibid.* S. 63

(22) ドイツに帰還したブレヒトが、ヴァレンティンと激しい討論をして、結局「私たちは次のような申し合せをするに至った、すなわち私たちはお互いに論争しないで、それぞれに適したように実践的に仕事をする、そうすれば私たちはある日、それからどうなったかわかるだろう」とグドルン・クラットとの対話でヴァレンティンは述べている。

Gespräch mit Maxim Valentin, Weimarer Beiträge. 6. 1976. S. 49

(23) DDR時代になって、ヴァイスコップフが雑誌『新ドイツ文学』(NDL)でもって行った働きもまた見のがしえないものがある。

チからも違った位置にありながら、私が冒頭にかかげたいいくつかの自明の事柄を裏づけるようである。

まずヴァイスコップフはヒーベルの本が副題にかかげるように、作家であるとともに「批評家」である。ルネ・ウェレックが文学理論と文学批評を分けた意味での文学批評家であった。ヴァイスコップフは1928年の終りから1933年の始まで『朝刊ベルリン』の文芸部にいて多くの批評を書いている。その点文学理論家であるルカーチとの相違を、ヒーベルは例の『リンクスタルヴェ』におけるブレードル、オットヴァルトの小説批判に関係させて述べている。⁽²⁴⁾ルカーチが「19世紀の偉大なリアリストの作品から抽象した」文学理論で、同時代の文学作品を「証明の対象」としてあつかい、「1933年以後の社会主義文学の高度の発展がプロレタリア革命時代に与えられた端緒が十分に成熟させた」ものであるという認識はなかった。ヴァイスコップフは「社会において新しいものの形成に骨を折っているひとびとを何よりも助けようとしていた」。ヴァイスコップフは当然ルカーチの本を読んで「暖い気持にはなれなかった」。

すでに述べたように、ルカーチはオットヴァルトの小説の批評文の標題として「ルポルタージュか形成か」をかかげたが、これがプロレタリア革命文学の重要な問題であることは見てきた。等しくプラハ出身であるエゴン・エルヴィン・キッシと同様にヴァイスコップフはブルジョア文学の心理主義による「小説」の滅亡を言い、それに代るのが新しい集団主義体制に応じたルポルタージュであるとした。そして1926年の最初のソヴェト旅行のルポルタージュ『二十一世紀への乗換え』を切り皮りに、1950年から52年までチェッコの大使として北京滞在のルポルタージュ『広東紀行』(1953)に到るまで多くのルポルタージュを書いてきた。もっともそのルポルタージュという形成は、やがてヴァイスコップフにあっては、クライスト、ヒーベルの伝統をつ

(24) Irmfried Hiebel: F. C. Weiskopf-Schriftsteller und Kritiker. S. 91 f.

いで「アネクドート」という形式に文学的に晶化されて、反ファシズム闘争の時期の有力な武器となる。ヴァイスコップフはルポルタージュに関する見解を、1930年の夏、プロレタリア小説についてベルリン放送でクルト・ヒルシフェルトと対談の際述べている。「もうすでに厳格な小説形式の爆破が、年代記的なものへの、自伝への、報告への、演説への共鳴が認識されてい⁽²⁵⁾る」。ヴァイスコップフはこの爆破の傾向をプロレタリア作家のみならず、例えばドス・パソスのようなブルジョア作家にも認め、文学形式としての小説は崩壊しつつあるとした。この放送は様々な批判を生みながら、同年11月のハリコフ会議に「ヴァイスコップフの件」として革命文学国際ビューローの活動報告に清算ずみとして出されている。ヒーベルはその報告についてこう書いている、「放送対談の実際の欠点、弱点を名ざし、かれの後の考えを評価するかわりに、正しい見解のみを用いるようにという絶対的要求をもって総括的拒否が行われた、その拒否は『充分マルクス主義的に明白に公式化されていない立場』というあいまいな紋切り型でとどめをさした⁽²⁶⁾」。なぜこのようにきっぱり革命文学国際ビューロー、そしてその背後のドイツ・プロレタリア革命作家同盟を批判し切ることができるのか。それはハリコフ会議が後に批判されるラップによって行われたからである。ヒーベルはヴァイスコップフの日記から、1950年に北京でエレンブルクと当時に回想してかわした会談を紹介している、「……そしてラップ信奉者は多数派だったが、反対派もいた、その一人が私だった。だから私は国際作家同盟の委員の候補者にも立たなかった、ラップ多数派への抗議の意味でね⁽²⁷⁾」。ヴァイスコップフはルカーチによって硬直した二者択一、「ルポルタージュか形成か」のルポルタージュではなく、むしろ小説の形式を「個人と社会との弁証法」的な混合形式として考えていたことは、同時代にかれが書いた小説『スラヴ人の歌』

(25) *ibid.* S. 74

(26) *ibid.* S. 79

(27) *ibid.* S. 86

(1931) がその証しになる。

ラップ解散をまねていたのは、結局ラップの同伴者作家に対する否定的な態度によることが大きかった。ファシズムの脅威が大きくなるに従って、プロレタリア革命作家はただたんに同伴者作家のみならず、ブルジョア陣営であってもファシズムに対して闘っている作家とは共同戦線をはらねばならない。ラップの唯物弁証法的創作方法に深くコミットしていたドイツ・プロレタリア作家同盟はそれだけに以上のような転換に当然困惑を感じた。ドイツ・プロレタリア革命作家同盟の作家たちにはそのイデオロギーから同時代のブルジョア作家は「許しがた」かった。1930年のアルフレート・デブリンの小説『ベルリン、アレクサンダー広場』をめぐる論争がそれを示している。ヒーベルはこう書いている、「デブリンの小説をめぐる論争で社会主義批評家の大部分は、芸術的構想におけるイデオロギー的欠点をきめつけることに限られていた。それに対して文学的形成的問題は大きく除外されたままだった。ヴァイスコップフもその批評ではこの大勢に従い、かれの論難のはげしさは、たとえば『リンクスクルヴェ』の文芸批評の感情を規定していたのと同じ、あのブルジョア文学に対する『許しがたさ』のあらわれである。かれはしかしそれをこえてさらにその向うの視点を生かし、それとともにブルジョア由来の文学作品の見方において新しい方向づけへの実際的な衝激を与え⁽²⁸⁾た」。さらにブルジョア作家ハインリッヒ・マンについて。ヴァイスコップフはこう書いている、「フランスやイギリスで、力にみちあふれた、社会を描くとともに批判する文学を創ったブルジョアジーという自分自身の階級から見すてられたハインリッヒ・マンはドイツにおいて、バルザックとフローベル、ゾラとフランス、スウィフトとディッケンスを自分のものとして数えているあの輝しい文学の唯一の代表者である⁽²⁹⁾」。それに対してヨハネス・R・ベッヒャーは、ハインリッヒ・マンがヒンデンブルクの大統領再選に公然と

(28) *ibid.* S. 103

(29) *ibid.* S. 106

承認を与えたという政治的理由から、ハインリッヒ・マンの今日までのすべての文学業績をそれと関係づけて判断した。ヒーベルはこのことに対して、「このような短終は（かれベッヒャー）が作家の文学的資格を正しく判断することのさまたげになるに違いなかった⁽²⁸⁾」と書いている。プラハで育ったヴェイスコップフはドイツ・プロレタリア革命作家が遭遇しなければならなかった転換において、謂わばかれらの代表とも言うべきベッヒャーよりも感じる困難は少なかったわけである。ラップ解散のあとの、1934年のソヴェト作家大会でかれがいかにか生々していたかをヒーベルは語っている。

西ドイツ⁽³⁰⁾ (BRD)

「社会主義国民文学」を自明の事柄として、ベルリンのドイツ芸術アカデミー文芸・言語部門、社会主義文学班によって総合的研究『二十世紀ドイツ社会主義文学史のために』が行われている DDR と違って、資本主義の BRD では、プロレタリア文学の評価も継承もすべて spontan（自発的）に行われている。

まず実践的継承としては、労働者のなかから生れた労働者文学運動である「グルッペ61」、その継承としての「ヴェルククライス」がある。労働者文学は敗戦後10年間は存在しなかった。共産党が禁止されていた BRD では唯一の労働者の政党である社会民主党 (SPD) の伝統をナチス前にさかのぼって、同党の労働者文学者レルシュ、バルテル、プレーガー等に接続しようとする散発的な試みはあった。50年代の終わりに、伝統的ルール地方に始めて労働者文学がおこった。センターはドルトムントの図書館長フリッツ・ヒュ

(30) 実践的継承として参考としたのは Werkkreis 70. Ein Baukran stürzt um Berichte an der Arbeitswelt. R. Pipers & Co. Verlag, München 1970 であるが、この方面の研究に関しては豊富な資料を用いての広島大学の脇阪豊氏、杉谷真佐子さんの報告に負うところ大である。その意味で私のこの文章は謂わば私なりのメモ程度のもので理解していただきたい。西ドイツの大勢に関しては、社会主義理論政策センター発行の「社会主義と労働運動」（1977年8月）の永井清彦氏の「西ドイツ社会主義の単約と展望」（報告）を参考にさせていただいた。

ーザーの「労働者文学と社会的文学のアルヒーフ」で、機関誌は『統一』、『組合評論』、1960年に詩集『われわれは光を夜はこぼ』を出している。ちなみに1953年を起点に、与党キリスト教民主社会同盟（CDU・CSU）に対する野党であるSPDは72年まで約3%位のアップ率で一貫して上昇してきた。52年にはドルトムント行動綱領を採択している。ヴァルター・ケッピング（IG 鉱山 役員）、フリッツ・ヒューザー、マックス・フォン・デア・グリューン、旧世代からのブルノー・グルホウスキーとヨゼフ・ビューシャ協力して、1961年に「ドルトムント・グループ61」を結成。60年代の始めから労働者文学始まる。この時代に奇蹟と呼ばれた経済建設は閉じている。1959年にSDDはバート・ゴードスベルク綱領を採択している。この綱領採択の直接原因は57年の総選挙でCDU・CSUが50%を突破したことであった。SPDは「階級政党から国民政党へ」路線の大転換を行うに到る。その結果61年に古くからのマルクス主義者は大量に脱落することになる。路線転換したSPDは着実に前進して、66年にCDU・CSUとの大連立内閣に到る。60年の始めから始まった労働者文学、それを代表する「ドルトムント・グループ61」はそのような政治情勢を背景として、まだブルジョア文学概念に支配されて、労働者の声を出すことができなかつた。文学的成果のみを考えて、労働者の書くことの困難な条件に眼をむけることはなかつた。そのような反省から「グループ61」を中心として新たに「労働者世界の文学のための職場サークル」（ヴェルトクライス）が生れた。その最初の試みはヴェルトクライスによるルポルタージュ・コンクールであった（1969年）。その審査員はハインツ・エスリンガー、マックス・フォン・デア・グリューン、フーゴ・エルンスト・コイファー、エリーカ・ルンゲ、エラスムス・シェーファー、フランツ・ショウナウアー、ギュンター・ヴァルラフで、その成果が『クレーンは倒れる、労働世界からの報告』である。それはもはや文学運動ではなく、職場における「書く」という政治行動である。ブルジョア搾取体制の滲透に対して、書き、その書いたものを批判しあうことによって解放（エマン

チパチオン)の⁽³¹⁾第一歩をふみ出すことである。

「ヴェルククライス」を生んだ60年代後半は世界的激動期であった。「ヴェルククライス」のルポルターージュ・コンクルの1969年の前年は西ドイツにおける学生、青年反乱激化の年である。この世界的激動期に西ドイツにおいても制度化されたものに対する批判者としてローザ・ルクセンブルク、ブレヒト、ベンヤミン、エルンスト・ブロッホ、アドルノ、マルクーゼ、そして『歴史と階級意識』のルカーチが呼び出された。そして同じアクチュアルな関心からプロレタリア文学の再評価が行われた。1969年にはリアリズムをマルクスの原点からたどるフリッツ・J・ラダッツの三巻本の『マルクス主義と文学』(ローヴォルト)が出、1970年にはドイツ・プロレタリア作家同盟の機関誌『ディ・リンクスクルヴェ』が複刊され、1971年にはプロレタリア革命文学をその発生においてさぐるヴァルター・フェンダースとマルティン・レクトアの『階級闘争における文学、1919～1923年のプロレタリア革命文学理念のために』(ハンザ)が出ている。社会民主党、第二インターのBRDであるが、1969年に改組された「ヴェルククライス」はそのラディカルな文学拒否、ルポルターージュ固守という点において、プロレタリア革命文学における労働者通信員運動に、さらに当時の反主流派の基礎にあったルポルターージュ性(批判されたブレーデル＝オットヴァルト)に通じはしないか。そしてそのようなラディカル性は矢張世界激動の波をくぐって生れたものと言えよう。

最後に「ヴェルトクライス」について、所感をメモとして記しておく。労働者がプロレタリアートという階級概念を喪失している現代、かつてのようにブルジョア文学に対して、プロレタリア文学の確立ということが成立しない。そのような明確な文学目標がない限り、「ヴェルトクライス」がその発

(31) 「ヴェルククライス」の組織は、各地に Werkstatt があり、ケルンの Werkstatt から、「ヴェルククライス」(Werkkreis Literatur der Arbeitswelt)の機関誌として、「Werkstatt」が季刊で出ている。

足にかかげたような〈文学〉拒否を原理とせざるを得ない。一般文学を無線放送にたとえるなら、文学の有線放送化と言えよう。「ヴェルトクライス」のこの文学の有線放送化、言いかえれば1968年の学生叛乱が生んだ「参加」(Mitbestimmung)を文学にも行おうとする努力の実体は、かつてのプロレタリア文学と較べたときに、西ドイツの労働界がかちとった労働者の経営「参加」(共同決定権)がネガチーフな意味で大きく影をなげかけているようである。次に「ヴェルトクライス」の〈文学〉拒否がどこまでつらぬぎ通せるかという問題があると思う、プロレタリア文学という目標がないにしても、この現代の労働者通信員たちは第二のヴィリ・ブレーデルになろうとしないか、すなわち「ヴェルトクライス」は文学の養成所になりかわる危険はないか。学生叛乱を含めた世界激動の波が去った今、その激動の波から生れた「ヴェルククライス」は、そのラディカルな〈文学〉拒否をどれだけ持続させ、拡大させてゆけるか。階級闘争を「経営協議会」によって隠蔽することによって経営利潤をあげてきたこの EC における謂わば労働のロビンソナーデとも言うべき西ドイツの労働を反映している「ヴェルククライス」が展望をもつとするならば、西ドイツ自身がかえりみることのない西ドイツ内の少数派 (DKP, KPD 等) ではなく、また溝を深めた社会主義国 DDR でもなく、むしろ経済的運命共同体とも言える EC 諸国、特にイタリア、フランス、スペインの労働世界 (そのユーロコムニズム) との接触からひらけるのではないか。